■IOPヨーロッパセンター主催特別講演会より■

# ゲーテと仏教

## ――「それより永遠の空虚のほうが、おれは好きだ」――

マンフレート・オステン
山崎達也　訳

ただいまは、ご丁寧な紹介のお言葉をいただき、心より感謝申し上げます。ただいまのお言葉を聞きながら、ロシアの格言を思い出しました。それは、「あまりにも多くの香煙を焚きすぎると、りっぱな聖人も煤けてしまう」というものです。さらにこんな話もあります。イギリスの上院で原稿を読みあげるさいに、うっかりして、ゴーストライターが欄外に書いたものまで読んでしまった、ある貴族のあわれな話なのですが、その原稿の欄外には次のように書かれていました。「この演説はまったく内容がないが、しかし上院には十分すぎるぐらいだ。」

そこで前回[1]に引き続き、今回もまた、原稿なしでみなさんにお話しすることにつきまして、みなさんの温情を願いたいと思います。

### 一　ゲーテとインド学

さて、このビンゲンでゲーテについてお話できますことを、まずなによりも感謝いたしております。と申しますのも、ゲーテは、一八一四年にビンゲンを訪れた後、一八一六年に聖ローフス礼拝堂に祭壇画を寄贈していますが、このようにビンゲンはゲーテにゆかりのある地だからであります。

さて「ビンゲンの聖ローフス祭」についてゲーテが書いた有意義な紀行文には、古典の意義について次のように書かれています。

「古典とは豊かにしてかつ優れているものをいう。他のすべての時代はしかし、豊かではあるが優れていないか、あるいはすぐれてはいるが豊かではないか、のどちらかなのだ。」

ヘッベル（Friedrich Hebbel）[2]がゲーテについて、「はじめにあったのは、音もなく、円環へと広がっていく点。最後にその点は世界を包み込む」と述べたとき、いずれにしても彼の念頭にあったのは、この偉大な劇作家のあふれるばかりの豊かさでした。なぜこのようなことにことさらに触れたのかと申しますと、ゲーテが世界を包み込むさいに、同時にブッダも包み込んだのではないか、と考えるからであります。この点については、ゲーテが生きていた時代がフリートリヒ・シュレーゲル（Friedrich von Schlegel）[3]や他の一連の学者たちによってインド学が学問として成立したという、まさにこうした時代に当たっていたということからすれば、なおさらのことだと思うのです。ゲーテは実際、インド研究の成果に大いに関心を持っていましたし、しかもこれはごくわずかの人にしか知られていないと思いますが、一七八七年ローマでインド旅行の計画をしているほどでした。

ゲーテがインド研究を集中的に行なった成果として、ここで彼の二つの重要な詩を取り上げてみましょう。一つ目は『パリア三部作』という大部の作品です。そこでは、下位の存在が神的存在へと結び付くことによって、神的存在と融合した人はとてつもなく自己を拡大し、悟りに到達することができること、つまりは神秘的仏教思想が描かれています。もう一つは『神とバヤデレ』です。そこでは、罪に陥った人が神性によって受け入れられてしまうことが語られています。したがってこの詩には、まさに革命的であると考えられる

言葉が述べられています。すなわち、「誘惑は上からやって来る」のです。つまりわたしたちが考えているように、誘惑は下からやって来るものではないのです。

さらにゲーテは『バガヴァド・ギーター』[4]、これは彼がヴィルヘルム・フォン・フンボルト（Karl Wilhelm von Humboldt）[5]を通じて知ったのですが、このインド詩の大作の研究に携わっています。とりわけゲーテが携わったのは五世紀のインド詩の大作であるカーリダーサのシャクンタラーなのですが、この作品はたとえば『ファウスト』の「劇場での序幕」に影響を与えています。

最終的にゲーテは、一八二九年、すなわち彼の死の三年前、エッカーマンとの対話のなかで、生命の一つ一つの段階を比較しているのですが、最後の段階すなわち最高の段階を静寂と名づけました。つまり意志が静まりきっている状態です。これでゲーテがインド哲学にいかに関わっていたかがはっきりすると思われます。つまりゲーテは生命と知恵の大きな一〇の歩みという仏教思想を明らかに知っていたということです。これについてゲーテが他の人にどの程度まで語っていたのか、それは定かではありません。と申しますのも、ゲーテが仏教についての考えを述べた明確な個所が実際には見当たらないからです。したがいまして今日は、ゲーテが行なった考察の範囲を彼の作品と伝記とに限定したいと思います。しかしながら、ゲーテのこうした考察はきわめて意義のあるものだとわたしは考えています。と申しますのも、彼の考察は仏教の諸原理、なかでも最後のほうでとりわけ触れてみたいと考えている、法華経の伝統にもとづく仏教の諸原理に一致していくからなのです。

まずはじめに、ファウスト悲劇にもとづいて仏教的世界とは反対の世界を提示し、つぎに仏教的思考に関してきわめて重要な手がかり、すなわち仏教的思考との類似性そして仏教的思考との一致を示している三つの詩人像がゲーテの作品に見られるので、このことに関して触れてみたいと思います。最後に、ゲーテの散文作品における彼独自の考え方、すなわち仏教と関連していると思われるきわめて重要な洞察力の基礎となっている、世界に対するゲーテの根本姿勢を明らかに





するために、『箴言と省察』（*Maximen und Reflexionen*）に触れてみたいと思います。

## 二　ファウスト的世界

それではまずはじめに、逆さまになった世界、反世界、すなわちファウスト悲劇からはじめましょう。動物（畜生）からはじめて菩薩の段階にいたる、つまりある意味では地獄から天国へといたる知恵の一〇の大きな歩みは、ファウスト悲劇においては逆に辿る道すなわち「天国からこの世を通って地獄へ」と至ることになります。

わたしたちはすでに、のっけから『ファウスト』の主要命題に踏み込んでいます。そして問題はこのような逆さまの道を歩むという、この悲劇の原理とは何なのか、ということです。西洋世界における思考と行動という観点からみると、この悲劇には何が示されているのか。ファウストのドラマに組み込まれているのは、要するに、西洋的思考の隠喩的な鏡なのです。そしてファウストは、仏教的思考の意味で「世界が苦しみに充ちたものである」と捉えることができない者の典型として描かれるのですが、問題はなによりも、どうしてこのようなことがいえるのか、ということです。ファウストは世界をその内奥との関連で知ろうと努力はするのですが、彼にはそれができない、ということです。つまりファウストがこの世に関わる苦しみをますます抱く者の典型、要するに、仏教の教えが説くものとは反対の行動となってしまうのはどうしてなのか。このような逸脱（aberratio）、すなわち仏教的徳からこのように外れてしまうことを命題化するとしたならば、それは要するに、理性（ratio）とそれに内在している性急さを前面に押し出してものごとを見るということです。

ファウストは精神の全体的な関連を考慮しない、ただ合理的にあわただしく志向する思考の典型です。つまり精神とはファウストにとって、光り輝くことのないまったく別次元のものなのです。そしてファウストは現代の総動員文化、科学文化そして加速化を、最も現代的なすべての呪い（「何よりも忍従に呪いあれ！」[6]）を

もって先取りしている者なのです。ファウストは、メフィストが神に説明しているような意味での理性でもって行動した者です。すなわちメフィストは神に向かって（非難として）次のように語っています。

「あなたが人間に天の光の影をお与えにならなかったら、
人間は少しはましな生活ができたでしょうに。
人間はそれを理性と呼んで、もっぱら
どの動物よりも動物らしくするために使っています。[7]」

ファウストは理性を動物的に使用し、いたるところで勝利を収めていきます。ファウストはそして、現代のオルギア祭（酒神ディオニュシウスの密儀）を催します。ここで語られていることは、現代の加速をもたらしたおびただしい道具、それはつまり、ファウストが自由に使えるようにメフィストが彼に与えた加速化する器具なのですが、このような器具によって世界が技術的にも科学的にも征服されていくということです。この器具とは、すぐにどこにでも行けるマント、すばやい剣、すぐに消えてしまう金銭、すぐに思いがとげられる愛です。

ところでファウストは、彼が復活祭の散歩をしはじめるときから、仏教的観念の意味における悪いカルマを持った者として描かれています。つまりファウストは大量殺人者だったということなのですが、たとえばファウストは助手のヴァーグナーといっしょに散歩に出かけた途端、幼いころ錬金術師であった彼の父とともに体験したことを、この助手に語ります。

「こうして、わしたちは途方もない煮つめ薬を持って、
この谷や山の中を
ペストよりもずっとひどく荒れまわった。
わし自身、この毒を幾千という人に施した。
彼らは衰弱して死んだ。わしは大それた人ごろし
なのに、





生きのびて、皆からほめられねばならぬのだ。[8]」

ということはつまり、自らの先祖や両親が毒を飲まされ、みじめに死んでいったことを知らない多くの人たちに、ファウストは尊敬されているということです。ファウストは実際、先ほどあげた道具を使って多くの犯罪、たとえばマルガレーテの運命そして母の運命を翻弄し、さらには兄弟殺しなどを犯すことで、動物的なものすなわち最下位に位置を占めるもの――そこから仏教は上昇してくるのですが――の痕跡を自分自身のなかに持っていることをファウストは披瀝しているのです。ファウストはしかしながら、このような所業から何も学び取ることもせず、それどころか、女神レテの霧のなかで忘却するための現代的オルギア祭を祝うことばかりに思いをめぐらせ、自らの所業を洗い流してしまいます。

そうこうしている間に、悲劇は第二部に入っていきます。そして第五幕で、この世での眼がくらんだ生活の満足感に浸りつつ、いや増していく苦しみをも抱きながら、ファウストは突然姿を現します。

ここで注目されるべきことは、憂いによって眼をつぶされ、実際に盲目となったファウストが織りなす多くの盲目的行為です。たとえばファウストは、フィレモンとバウキス、そして放浪者として居わせていた神々の父であるゼウスを力ずくで殺させてしまうのです。さらにファウストはとてつもなく恐ろしい錯覚のなかで、「自由な土地で自由な民」と暮らしていると信じ込んでしまうのですが、このことは実は、現代の強制労働を意味しているのです。ヴァイマールもブーヘンヴァルト[9]もここではいっしょです。というのも、

「人身御供の血も流されたに違いありません。
夜中に苦しみの悲鳴がひびき、
海のほうへあかあかと燃える火が流れると、
あくる朝には運河が一つできていました。[10]」

とバウキスによって語られているからです。最終的にファウストは、現代の山師的発想をするために、巨大

な排水溝を自らの墓だと勘違いをして、最後の誤謬のとりこになってしまいます。

なぜここで、このようなことに触れたのかと申しますと、無知や無明のとてつもない光景、そして世界がますます苦しみに充ちていくという光景についてじっくり考えることは重要であると考えるからです。以上のことにじっくり取り組んでいくならば、ファウストが仏教的背景なしに以上のように理解したことはまさに考察に値するものではないでしょうか。

## 三　メフィストフェレスの精神

仏教的方向へと向かうファウスト的反世界は、興味深いことに、『ファウスト』のなかにも多く見られます。ゲーテは、ほんの少しでも真理の方に向かおうとするならば、どんな言葉に対しても矛盾を形成せざるをえないという原理を信条としていました。たとえばゲーテはこう言っています。

「矛盾だらけのところこそ
わたしの最もこのむ散歩道。
迷う権利をひとに認めたがらぬとは
いやはや愉快なこと。[11]」

「天国からこの世を通って地獄へ」というファウスト悲劇の運命的な成り行きのなかで現れてくる矛盾的思考の代表は、なんといっても、メフィストです。つまりメフィストは、「仏教徒」的な命題を作成し、次のように語ります。

「それより永遠の空虚のほうが、おれは好きだ。[12]」

メフィストに対するゲーテの見方は、はじめ直接的にはメフィストには結び付かないと思われるのですが、じつはゲーテはここで深遠なる次元からメフィストを描いているのです。じつはメフィストこそが、大いなる明快さをもって世界の本質を見抜いている者なのです。メフィストが犠牲者ファウストのことを骨の髄まで知り尽くし、彼を導くことができるのは、悟りに達





することができないメカニズムと苦しみが軽減しないメカニズムをメフィストがすみずみにいたるまで知り尽くしているからこそです。メフィストはたとえば、砂のなかに横たわっている死んだ老人ファウストのほうに視線を向け、次のように語ります。

「永遠の創造がいったいなんになるのだ！
創造されたものを引っ立てて無に帰せしめるとしたら！
『過ぎ去った！』という文句になんの意味があるだろう？
元からなかったと同じようなものだ。
それなのに、何かあるかのように、ぐるぐるまわりしている。
それより永遠の空虚のほうが、おれは好きだ。[13]」

ちょっとここで次のように考えてみてください。ブッダ自身がバラモン教の異端者、すなわちブラフマンとアートマンという二つの原理を受け入れないで、その代わりに、ニルヴァーナ（涅槃）を考えるに至った者であった、と。すると、「それより永遠の空虚のほうが、おれは好きだ」という命題は、ニルヴァーナの境地へと近づくための独特の方法を表示しているのだということがおわかりになると思うのです。ゲーテはここで、「空虚」すなわち「消え去ること」を独自に提示し、そしてこれはニルヴァーナと結び付いているのですが、このようにどこかに「消え去ること」を愛したメフィストの言葉で、ファウストの行為の無意味さを見抜いているのです。

以上のことについては、次のような説明を付け加えておくべきだと思います。『ウパニシャッド』には、ブラフマンとアートマン、すなわちすべての存在者の本来的・根本的な原理としてのブラフマンと、個体である個々の魂としてのアートマンとの同一性を認識するという可能性のなかに解脱があると説かれていました。つまり、この両原理が相互に関係し、一つの全体をつくっており、いやまさに本来にして同一であるという認識に達するのならば救われるというのが、バラモン

教と『ウパニシャッド』の教説です。

しかしブッダはこうした救済思想をきわめて適切に排除し、その代わりに、ニルヴァーナという「巧みな考え」を取り入れたのです。これがまさに、このとてつもない悲劇の最後でメフィストが指摘している点なのです。興味あることに、メフィストはこの点についてすでに悲劇の最初のほうで解説しています。というのも、悲劇のはじめでは以上のようなニルヴァーナの背景を考えることなく、自己自身を紹介できるからなのでしょう。メフィストは次のように語っています。

「私は常に否定する精神です！
それも至当です。なにゆえなら、生起するいっさいのものは
ほろびるにあたいするのですから。
してみれば、なにも生起せねば一だんとよかったでしょうに。
そこで、あなたがたが罪悪だ破壊だと呼ぶもの、
つづめて言えば、悪とお呼びになるいっさいのものが、
私の本来の成分です。」[14]

ここで『ファウスト』のなかで「それよりも永遠の空虚のほうが、おれは好きだ」という命題とは対照的な命題をみることができます。すなわち「してみれば、なにも生起せねば一だんとよかったでしょうに」です。ここには、『ファウスト』の否定的と称せられる人物によって述べられる、仏教との独特の一致点があるのですが、このような観点からの考察はいまだかつてなかったように思われます。

## 四　観想的生と実践的生

さてここで、ある一人の登場人物に至りつきます。その人物とはメフィストとはまったくの別な仕方で、すなわち肯定的な意味で、仏教的原理と一致しているのではないかと思われる人物、塔の番人リュンコイスです。リュンコイスは『ファウスト』第二部第五幕に登場してきます。





ところでゲーテには、彼が生きていた時代すなわち眼がくらんだ世界においては、この作品を理解できるのは誰もいないという確信があったので、ゲーテはこの第二部を封印してしまいました。

ゲーテはこの当時、ヴィルヘルム・フォン・フンボルトに宛てて次にように書いています。

「混乱した行為に関する混乱した話が世界中を支配しています。[15]」

つまりゲーテは、ファウストの盲目と暴力行為、すなわち性急な行為と性急な思考が、自分が生きていた時代である一九世紀を支配している原理であると見ていました。この第二部は誰にも理解されないであろうという確信がゲーテにはあったということを先ほどお話ししましたが、それはどうしてかというと、この作品に設置された、あの隠喩的な鏡が、二一世紀の今日になってようやく知られるようになった鏡だからなのです。

リュンコイスという人物の正体はこの鏡の肯定的な意味に関連しています。リュンコイスはここでは悟りの境地に達した唯一の人物です。彼はこの世の増していく苦しみとは無関係な人物であり、ファウストの行為になんら関与することはありません。リュンコイスは、かつてゲーテが「行動者はつねに無良心である。観察者以外のだれも良心をもたない」[16]といった意味で世界を観察し悟りに達した者なのです。ですから、ここには以上の観点から正反対の位置にいる二人の人物が描かれています。ひとりは良心なき行為者すなわちファウストです。もうひとりは静寂のなかで観想的生を送る者、ある意味では仏教的に開かれた境地に立つことによって仏教的連関を突然に認識した観察者です。つまりリュンコイスが認識したものは、わたしが先ほど述べた結び付き、すなわち『ウパニシャッド』でいえば、ブラフマンとアートマンとの結び付き、自らの人格と世界との同一性、それによって自己自身が自然と結び付けられるということです。リュンコイスはたとえば、塔の上から世界を観察し、「こうして万物の中

に永遠の飾りを見る[17]」と語っています。

これは短い文ですが、このなかには大いなる存在連関に対するリュンコイスの洞察が語られています。彼はまた、「そしてそれがおれの気に入るように、おれ自身もおれの気に入る[18]」とも語っています。つまりこの悲劇のなかには、「観想的生」(vita contemplativa) という一つの立場が用意されているのですが、この立場が指し示している方向は、現代の大量生産文化、「実践的生」(vita activa) の肥大化そしてファウストに典型的に見られる増大していく苦しみとはまったく逆の方向です。

## 五　人造人間の願望

ところで『ファウスト』のなかに、仏教的に意味のあるもう一人の人物が登場します。それはホムンクルスです。このホムンクルスでゲーテが大胆にも描こうとしたのは、計算 (ratio) による西洋的大量生産文化と理性中心主義文化に縛られ、もはや造るべきものを持とうとしない、新しい典型的な人物でした。

こんなことを申しますと、ひょっとしたら不思議に思われるかもしれません。というのも、ホムンクルスはまさにこの西洋においては、人工物として知られているからです。つまりホムンクルスは実際、理性が支配する文化という意味からいうと、今でいう分子生物学と遺伝子技術を身につけた助手ヴァーグナーによってフラスコのなかでつくられたものだからです。ですからホムンクルスは、現代に置きかえていえば、たとえばクローン羊ドリーのように性急な理性文化の汚点として考えられた人工物と言っていいでしょう。つまり、ホムンクルスには生産能力がないということなのですが、これこそが、遺伝子型 (Genotyp) を介入させることによって人間の表現型 (Phänotyp) を完全に変更させることができるという進歩観と結び付いた大いなるユートピアであり、サイエンス・フィクションなのです。

このようなものが誕生するだろうということをゲーテは予想していました。また同時に、このようなプロジェクトが破綻するであろうことも予想していました。つまりは、存在するものがまったく違った方向へと歩





み出すという大いなる転換がやって来るであろうということです。ホムンクルスはファウスト的な科学世界に別れを告げ、そして自らが欠陥を持って不完全に生まれてきたがゆえに、全宇宙と結び付き、「完全な」存在者になろうとします。ホムンクルスは、仏教のものではないのですが、古代の哲学者、いわゆる「ソクラテス以前の哲学者」(die Vorsokratiker：彼らはインド文化から非常に強い影響を受けているといわれています) に助言を求めます。なかでもタレース[19]と神話に登場してくるプロメテウスは、ホムンクルスに、苦しみを増大させる、間違った、不完全なる本性の意識をまったく別の状態へと転換することを助言します。彼らは次のように語ります。

「殊勝な願いに従って、
初めから造化のわざをやりなおすがよい！[20]」

「地上の営みは、どんなものであろうと、
けっきょくむだな骨折りにすぎない。
生命には波のほうがずっと役に立つ。
おまえを永遠不変の水の中に運ぶのは
変幻自在のプロメテウス・イルガだ。[21]」

そして彼らはホムンクルスに加速化の経過について助言をします。それは創造の初めからの経過ということであり、すなわちふたたび上昇するために、いったん三五億年前へと宙返り (salto mortale) することです。もっともそれは、悟っていない古代の人間たちの意識と同じ状態には絶対にならないという条件のもとのことですが。彼はホムンクルスに次のように助言します。

「ただ、上のほうの仲間にはいろうとあせるな。
おまえは人間になってしまったら、
それで、すっかりおしまいだからな。[22]」

さらにここにはある仕掛けがあって、それはホムンクルスが変身するさいに、まったく別の世界を目指し、そしてすべてを包み込む愛との一致を示すものです。

その仕掛けとはエーゲ海の入江で催されるガラテーの大エロース祭のことなのですが、ホムンクルスは創造の始原に戻ることで、その祭りに参加することになります。ホムンクルスは、ソクラテス以前の哲学者たちの助言にしたがって、大きな光を放つ海に身を投げ、その結果ガラテーのエロースの車に取り付けてあったフラスコが砕け散ってしまいます。ホムンクルスはそうして、いま万物を愛する境地にあり、創造の始原に帰還していくのです。これはゲーテのまったく独創的な考えなのですが、仏教的背景のもとにこれをあらためて考え直してみる価値は十分にあるのではないでしょうか。

## 六　ニルヴァーナのゲーテ的パラフレーズ

さてここで、『ファウスト』とは直接関係がないのですが、第二部の成立とほぼ同時期に書かれた小説『親和力』(*Die Wahlverwandschaften*) に出てくる人物を取りあげてみたいと思います。その名はオッティリエです。彼女には、仏教の諸原理と一致し類似性をもっていることが多くの点で見られます。彼女はリュンコイスと同様、観想の境地にいる人物ですが、まったくと言っていいほど注目されてこなかった人物です。この小説のなかでの彼女は、理性的ではないし、また性急さに駆り立てられることのない唯一の人物であり、さらにこの小説に登場してくる人物に特徴的な山師的なところもありません。そのうえ彼女は身を任せることもありません。彼女は、自分の腕から川に落ちた子を溺れ死なせてしまうことで、増大していく苦しみの深遠な渦の中に巻き込まれるのですが、しかしその瞬間、彼女は徹底的な禁欲生活に身を投じて、身を任せることを完全に拒みます。それどころか彼女は、この世の生存すら拒み、ニルヴァーナのゲーテ的パラフレーズ（言い換え）と思われる境地へと入っていきます。オッティリエは、要するに、カフカの『断食芸人』(*Hungerkünstler*) を先取りした人物といえましょう。

彼女は結局、すべてを諦観して死んでいくのですが、ここでの諦観とはゲーテが自分自身に対しても見ていた、例の大きな可能性の一つなのです。さらにこれは、





ゲーテが『ヴィルヘルム・マイスター』においても、自己を拒みこの世の苦しみが増大することに与しない可能性としてテーマ化したものです。オッティリエが歩んできた軌跡は、ファウスト的な加速化文化に正反対の位置にある世界をゲーテが再三再四、いかに自らの作品の中に取り入れようとしたのかを深い次元から物語っています。

ちなみに言えば、以上のようなゲーテの試みはそれほど大きな成果を得ているとはいえません。『親和力』に出てくるほかの人物に関しても、わたしが先ほど述べた観点から解釈されているわけではないのですが、ただオッティリエだけが誤解されてきたのです。いずれにしても、オッティリエは記憶に留めておくべき人物だと思います。

## 七　輪廻と再生

ここでわたしたちは、ゲーテ自身に関わる問題に至りつきます。その問題は、日々の生活のなかでゲーテ自身に提示されたものであり、少なくとも仏教に近いものに関わるものです。ゲーテは、彼がまだ若いときに親交のあったシュタイン夫人に次のように語っています。

「おお、あなたは前世において
私の姉か妻ででもあったのだろうか。[23]」

つまりゲーテは、『ウパニシャッド』からすなわちバラモン教から仏教も受け継いだ再生の思想を、自分で徹底的に研究し、取り入れていたのです。要するに彼は、前世でのふるまいに関する業報的因果律というものの可能性を理解していたということです。エッカーマンに向かってゲーテが、「ただ最後まで休みなく働くならば、自然はわたしにもう一つの存在を与えるにちがいない」と、死を超えてもなお生き続けるという思想が行為の思想に由来するということを語っているところからすると、ゲーテは高齢になっても再生と輪廻について考えていたということがわかります。つまりゲーテが触れた輪廻と再生という点に関して、仏教と

のおどろくべき一致があるのです。こうした考えをゲーテは、けっして多くの個所ではないのですが、言及しています。

## 八　宇宙と人間との合一

このような思想は、エンゲルベルト・ケンペルというドイツ人の博物学者が日本について記述していることを通じて、ゲーテには特別に身近なものに感じられたのかもしれません。ケンペルは一七世紀当時、オランダ人になりすまして日本に入り込み、膨大な紀行文を書いているのですが、そこで日本仏教についても言及しています。ゲーテは、エンゲルベルトを通じて、日本語の「ギンキョウ」つまり「銀杏」に由来する「ギンゴ」(Gingko)、すなわちイチョウの木と葉を知るようになります。彼はイチョウの葉を仏教的な観点から、「合一した二つの本性」という意味で解しています。ゲーテはここで、わたしたちが通常、主観と客観との間に見ている表面的な分離をこのイチョウの葉に見ているのですが、同時に彼は、主観と客観、肉体と精神とが究極的には同一であるということ、すなわちそれらはお互いに密接に結ばれていて、一つの大きな全体に関わっていると解しました。

このイチョウの葉でもってゲーテが最終的に抱いた考えは、それは詩「ギンゴ　ビローバ」が収められている『西東詩集』(*Der West-östliche Divan*)のなかに表現されているのですが、理性文化を放棄し、合一した二つの本性という意味で別の道をわたしたちは歩まねばならないのではないか、ということです。ともかく理性に代わって、わたしたちはまったく別の認識手段を見つけるべきではないでしょうか。その認識手段とはすなわち、ゲーテが『西東詩集』のなかで、いわゆる「上位の統率者」と名づけた人間精神にほかなりません。これこそが、主観と客観との同一性、またゲーテが考えたように、わたしたちのすべてが存在している宇宙の大きなつながりのなかで、自然と人間との同一性を認識することなのです。これについてゲーテは次のように言い換えています。





「いのちとは愛であり、
いのちをいのちたらしめるのは精神です。[24]」

この言葉が意味するのは、宇宙の全連関に関する、まったく別の、そしてより高度な認識へといたるある種の仏教的上昇だと思われます。

ゲーテのこうした考究は、スピノザの著作の研究を通じて、ある程度ですが、すでに準備されていました。彼は哲学者であるヤコービ(Friedrich Heinrich Jacobi)[25]を通じてスピノザに取り組もうと思うようになり、その結果ゲーテは、いわゆる汎神論すなわち神と自然との一性、それによる自然の一部としての人間と神との一性という思想を身に付けていったのです。たとえばウエルテルを取り上げてみましょう。彼の書簡のいたるところに、宇宙・自然と一になることの感情、連帯感、感覚が描かれていることに気づきます。ウェルテルがこの包括的なハーモニーを感じ取り、こうしたつながりに対して、高慢な理性をもってではなく、謙虚な姿勢で接しようとしますが、こうしたことでわたしたちが理解できるのは、要するにウェルテルは汎神論者であるということです。あるいはこう言えるかもしれません、彼は仏教徒であった、と。

## 九　感謝の念

さてここには、別の優れた思想が語られています。すなわちゲーテは、感謝(報恩)をわたしたちがこの生存において到達できる最も高いものであると見なしているのですが、これは仏教思想に密接に結び付いていると考えられます。ゲーテは、わたしたちが宇宙や自然と結び付けられていることを次の言葉で明示しています。

「生命が価値あるものであるとしたら、ただそれは
生命が感謝するにふさわしいからである。[26]」

この言葉はちょっと古臭く聞こえると思いますが、要するに、わたしたちが感謝の念をもって生きるとき、はじめて生命は意義深いものになるということです。

これは仏教的原理と密接な関係にある考えだと思われます。

ところでゲーテ自身は、この世の苦しみをいかに軽減させることができるのか、ということをずっと考えていました。このことは最後にとくに指摘しておきたい点です。「われわれはすべて、生きることで苦しんでいる」とゲーテは言いました。つまりゲーテは、この世の苦しみがいかにあるのかを完全に知っていて、それを自分なりに軽減しようとしたのです。たとえば彼は『西東詩集』のなかで蜘蛛に眼を向けながら、次のように話しています。

「一匹の蜘蛛を殺したとき、
それがはたして定めなのか、と自問した。
神さまは、私と同様、蜘蛛に向かっても、
この日々にあやかることを望みたもうたのだから！」[27]

ゲーテは、苦しみの軽減をとりわけ人間の不完全性と関連づけて考えていました。つまりゲーテは、わたしたちが抱いている不完全性とは、わたしたちが愛と同情へと上昇できる可能性なのだと理解していたのです。ゲーテは次のように述べています。

「たとえ失敗しても悲しまぬがいい
欠如こそ愛のはじまり――
もし欠点をまぬがれぬとしたら、
よろこんで他人を救すようになろう。」[28]

ご静聴、まことにありがとうございました。

謝辞

今回の訳出にさいしても、前回と同様、創価大学文学部の田中亮平教授にたいへんお世話になった。とくにゲーテの作品からの引用に関しては、懇切に丁寧にご教示下さった。この場を借りて、感謝の意を表したい。





注

(1) 二〇〇四年四月二四日、ドイツSGIのヴィラ・ザクセン総合文化センターで行なわれた講演「加速する時間あるいは人間の自己破壊」。なお、この講演の翻訳が『東洋学術研究』第四十四巻第一号（二〇〇五年七月三日発刊）に掲載されている。

(2) 一八一三年―六三年。ドイツの劇作家・詩人。

(3) 一七七二年―一八二九年。ドイツの芸術批評家。兄のヴィルヘルムといっしょに雑誌『アテネーウム』を発刊し、ドイツ・ロマン主義運動を推進した。

(4) 一世紀頃成立した古代インドの叙事詩で、「崇高なる神の歌」を意味する。

(5) 一七六七年―一八三五年。ドイツの政治家・言語学者。ベルリン大学創立については多大なる貢献をした。

(6) 『ファウスト』第一部、「書斎」に出てくるファウストの台詞。ゲーテ、『ファウスト』第一部、「書斎」、高橋健二訳、『世界文学全集2』、河出書房、五〇頁。

(7) 『ファウスト』第一部、「天井の序曲」、前掲書、一一頁。

(8) 『ファウスト』第一部、「市門の前」、前掲書、三六頁。

(9) ヴァイマールの近郊にある街で、ここにはナチスが建設した強制収容所があった。

(10) 『ファウスト』第二部、第五幕「開けた地方」、前掲書、三四四頁。

(11) 『穏和なクセーニエ』、飛鷹節訳、『ゲーテ全集』第一巻、潮出版社、三五六頁。

(12) 『ファウスト』第二部、第五幕「宮殿の大きな前庭」、前掲書、三五七頁。

(13) 『ファウスト』第二部、第五幕「埋葬」、前掲書、三五七頁。

(14) 『ファウスト』第一部、「書斎」、前掲書、四三頁。

(15) 『ヴィルヘルム・フォン・フンボルトへの書簡』、一八三一年。

(16) 『箴言と省察』、岩崎英二郎・関楠生訳、『ゲーテ全集』第一三巻、潮出版社、二四一頁。

(17) 『ファウスト』第二部、第五幕「深夜」、前掲書、三四八頁。

(18) 『ファウスト』第二部、第五幕「深夜」、前掲書、三四八頁。

(19) 前六四二年頃―五四六年頃。小アジアのミレトス出身の哲学者でアリストテレスは彼を「哲学の創始者」と述べている。タレースによれば、万物の根源は水である。

(20) 『ファウスト』第二部、第三幕「多島海の岩の入江」、前掲書、河出書房、二五七頁。

(21) 『ファウスト』第二部、第五幕「深夜」、前掲書、二五七頁。

(22) 『ファウスト』第二部、第五幕「深夜」、前掲書、二五八頁。

(23) 『くさぐさの歌』、松本道介訳、『ゲーテ全集』第二巻、

潮出版社、二七頁。

(24)『西東詩集』、生野幸吉訳、『ゲーテ全集』第二巻、潮出版社、一四九頁。

(25)一七四三年―一八一九年。生涯教壇には立たなかったが、多くの思想家・哲学者と交友があった。なかでもスピノザをめぐって、ゲーテやレッシングとは親しかった。一七八三年から始まったメンデルスゾーンとの間で交わされたいわゆる汎神論論争は有名。

(26)『カール・アウグスト公への書簡』。

(27)『西東詩集』、一三二頁。

(28)『穏和なクセーニエ』、飛鷹節訳、『ゲーテ全集』第一巻、潮出版社、三六四頁。

(マンフレート・オステン／
アレクサンダー・フォン・フンボルト財団元事務局長)
(訳・やまざき　たつや／東洋哲学研究所研究員)